

取材・文=小沢優子

Text=Yuko Ozawa

写真=今井正由己

Photo=Takayuki Imai

連載

指揮者
の
仕事場
探訪
24

INTERVIEW WITH MAESTRO AT HOME >>>

小松長生

CHOSEI KOMATSU

「芸高」の入学辞退後、東京大学美学芸術学科、イーストマン音楽院大学院指揮科へと進み北米で指揮活動を開始した小松長生は、多彩なレパートリーと活動でも知られる指揮者である。現在コスタリカ国立交響楽団桂冠指揮者、及びセントラル愛知交響楽団名誉指揮者。自宅は東京の杉並にあるが、最近は教鞭をとる愛知県名古屋市の金城学院大学ですべての読譜を行っているという。「春休み」、学生や教職員の姿がまばらな3月初旬、キャンパスを訪れ話をうかがった。





音楽スタジオでスコア・リーディングするのが常。この日も普段のスタイルで、ピアノを弾いてくれた

大学の音楽スタジオで

新しく建てられた棟の5階にある音楽スタジオ。2013年に金城学院大学文学部に音楽芸術学科が新設され新館が出来てからは、ここが小松の仕事場である。東京の家にある楽譜はすべて大学に送って研究室に置き、廊下を隔てて真向かいの音楽スタジオでスコア・リーディング。机の上にスコアを広げて読んだり、ピアノを弾いたりしている。「昼夜関係なく集めることができるんです」という眺めのよい広々としたこの部屋は授業のための教室でもあり、ピアノのそばには学生用の電子ピ

アノが10数台。一人ひとりがスコアをじっくりと勉強できるようにと、1曲につき大型サイズの45冊を揃え、学習環境の充実にも心を配っている。

忘れられない教え

小松が最も影響を受けた指揮者として挙げるのが、留学前に無駄のない実践的な指揮法を教えてくれた伊藤栄一と、アメリカの指揮者デイヴィッド・ジンマンである。エクソン指揮者コンクールに優勝した後、小松はバッファロー管弦楽団エクソン派遣指揮者を経てボルティモア交響楽団準指揮者となっているが、この時の音楽監督がデイヴィッド・ジンマン。「彼はオーケストラをアイロン掛けのように根気良く仕込み、独奏者に鳥もちのように貼り付いて伴奏します。目から鱗で、後年私が芸術監督になってから当時修得したことの有難味が身に染みましました」と語る。

また、ボルティモア時代には、治る見込みのない難病の子どもたちのためのワリスマス・コンサートを大病院で指揮し、自分の仕事の意味を突き付けられ、使命の重さを実感する体験もしている。

コスタリカ国立交響楽団

修行時代の後、小松が積み重ねていったキャリアの中で興味を引くのがコスタリカ国立交響楽団である。自然に恵まれ、軍備を持たず、産業が豊かで文化水準も高い中米南部の国コスタリカ。「観光立国で、コンサートのお客様の半分以上はカ



コスタリカ国立響を指揮する小松 (写真提供: 小松長生)

ナダやアメリカやヨーロッパからの方です。国際色豊かな観客で、皆さん耳が肥えています」

小松が1940年創設のコスタリカ国立交響楽団の芸術監督になったのは世界公算によるもので、「春の祭典」を暗譜で指揮するなどして、約160人の中から選ばれた。初顔合わせのコンサートに際し、楽員から「地球の裏側からきて、文化が異なる我々どう通じ合えるのか?例えばユーモアのセンスとか」と意地悪な質問が飛んだが、それなら、チョウセイ・コマツという名前を、ホセ・カマチヨに変えようかと答え、オーケストラは大爆笑した。マラー「交響曲第1」、2、3、4、5、9番、R. シュトラウス《英雄の生涯》、《ツアラトウストラはかく語りき》、シオスタコーヴィチ「交響曲第1、5、10、11番」、メンデルスゾー



仕事中の癒し、アニメ「ウサビッチ」に登場するキャラクター、キレネンコ

ン(エリヤ)、オルフ(カルミナ・ブラーナ)、ドヴォルジャーク「レクイエム」、ハイドン《天地創造》などを指揮することができ、カナダ時代には編成的に選曲の制約を受けていた分を取り返した、と振り返る。

素晴らしいアーティストたちと共演

ジンマンのもと年間40回近くのコンサートを任されていたボルティモア時代から、すぐれたアーティストとの共演歴は豊富である。1983年にアスペン音楽祭指揮奨学生の時に出会った当時11歳の五嶋みどりは、「チョウセイが監督になったら弾きに行くよ」との約束を1996年にカナダのキッチナー・ウオーターール交響楽団客演で果たした。みどりは2009年にはコスタリカ国立響にも来てくれた。

みどりの弟の五嶋龍は、彼が生れた頃から知っていて、ベビーカーを押していたら父親に間違えられたエピソードもある。1998年、小松は10歳の龍をキッチナー・ウオーターール響に招き、2008年には、20歳の龍が全国6都市で東フィルなどに行ったコンサートのすべて



【上】1983年アスペン音楽祭にて。前列左から小松、ギル・シャム、五嶋みどり、右端が竹澤恭子
【右】20年来の親交がある小曽根（左）と（写真提供：小松長生）



を指揮している。
ジャズ・ピアニスト小曽根真との出会いもまた印象深い。小曽根がクラシック界で活動するきっかけとなった演奏会は小松の指揮である。以来、小曽根のピアノ協奏曲《もがみ》東京初演と海外初演（コスタリカ国立響）やモーツァルト、ガーシュインなど、彼との共演と親交は20



秋のガラ・コンサートに向け、学生を厳しく!? 指導中

ガラ・コンサート

年以上に及ぶ。「真さんの伴奏で指揮台にいると、心は浄化され、リングサイドで観戦するようなくわくわくした感動を覚えます。自分の演奏を憶えていない、再現できないと彼は言うんです。天才だなと思いました。何かが降りて来ている」
Take6、谷村新司、石井竜也、小松亮太らジャンルを越えたアーティストたちとの協演も多く、「北米での修業時代、ポップスコンサートでジョニー・マティスやアンディ・ウィリアムスらを伴奏していたので、大好きです。いつも新鮮なエネルギーをいただいています」と話す。

いろいろな思い出話で盛り上がったところで、小松が教授を務める金城学院大

学のガラ・コンサートについて。オーケイションで選ばれたピアノ、声楽、管楽器専攻の学生10数名が小松の指揮するセントラル愛知交響楽団と共演して協奏曲やアリアを披露するこのガラ・コンサートは毎年秋に開催。「全国でも例のないプロジェクト」であるこのガラ・コンサートの意義について小松は語る。「プロのオーケストラとリハーサルで接するだけで、学生たちの音楽創りは驚異的に変貌して行きます。本番のときには別人のようです。学生たちそして周りの人々の人生を豊かにする一助となると確信し、続けていきます」

この日はちょうど2016年度のガラ・コンサートに出演が内定している二人の学生のリハーサル、ということ、5階の音楽スタジオから、隣接するもう一つの新館の1階にある音楽ホールへと移動。ピアノと声楽の教授も立ち会い、まず声楽の学生から。小松が指導するリハーサルをしばらく見学させていただいた。

初演のつもりで

細川俊夫《時の深みへ》や千住明のピアノ協奏曲《宿命》（TVドラマ『砂の器』のテーマ曲）の世界初演、レコーディングなど、現代作曲家の新作初演も手がけている小松だが、伝統の既存の曲であっても初演のつもりで取り組んでいる。「バッハであれ、ドヴォルジャークであれ、ラフマニノフであれ、そして現代曲であれ、世界初演のつもりですべてのスコアに臨みます。作曲家は今ここに生きていたらどのようにしていたのかなあ、

PROFILE

小松長生 Chosei Komatsu

福井県生まれ。東京大学美学芸術学科、イーストマン音楽院大学院指揮科卒。エクソン指揮者コンクール優勝。パッファロー管エクソン派遣指揮者、ポルティモア響アシエート、キッチナー・ウォーターラー交響楽団及びカナダ室内アンサンブル音楽監督、武生国際音楽祭音楽監督、東京フィルハーモニー交響楽団正指揮者等を経て、2011年よりコスタリカ国立交響楽団桂冠指揮者及び、セントラル愛知交響楽団名誉指揮者。これまでにモントリオール響、ケルン放送響、プラハ放送響、北ドイツフィル、ポリシヨイ劇場、キエフ国立オペラ、ソウル・フィル、モスクワ放送響、ヴェネズエラ国立響、「東急ジレバスターコンサート」、「題名のない音楽会」、「NHK BS プレミアム」、「NHKらららクラシック」、TBS『砂の器』（千住明作曲、羽田健太郎／日本フィル）、ベルリン・フィルハーモニーホール創立50周年記念日独第九演奏会（2013年4月）などを指揮。金城学院大学教授。音楽藝術学博士。



【著書】
リーダーシップは「第九」に学ぶ
（日本経済新聞出版社）

と考えながら……。私は、作曲家から、たとえばブラームスから世界初演を直接頼まれている気で、変な先入観を排除し、ただ自分を媒介として差し出すことを心がけます」
明るく気さくな人柄。音楽に対しても曇りのないまっすぐな心で向き合っている。ここ数年、コスタリカはもとより、ワシントンD.C.、ベルリン、アムステルダム、ジュネーヴ、香港と飛び回り、今年も、群馬交響楽団、東京佼成ウインドオーケストラ、セントラル愛知響、コスタリカ国立響、年末恒例の《第九》（日フィル／東京フロイデ合唱団、セントラル愛知響）他、多忙な小松。益々のご活躍を祈りながらインタビューを終えた。